

二度の学校統合を機に 生徒が自ら考え行動できる 「地域を支える」人材の育成へ

学校現場で
カリマネはどのように
取り組まれているか?

Challenge Report 1

真庭高校 落合校地 (岡山・県立)

二度の統合で学校の方向性を見失いつつあった同校。生徒が自ら考え行動する総合的な学習の時間への改革が転機となり、学校は活気を取り戻しました。その成功のポイントに迫ります。

取材・文 / 藤崎雅子



かつて子どもたちが駆け回って遊んだ「しめ山」。これを世代を超えて交流できる場にするプロジェクトに、地域と共に取り組んでいる。



学校データ

2011年設立 / 普通科・看護科 / 生徒数301人(男子59人・女子242人) / 進路状況(2016年3月実績) 大学18人・短大7人・専門学校17人・就職11人・看護科専攻科23人・その他1人

進学校としての教育が 生徒の実態とかい離

少子化が著しい岡山県北部一帯では、この十数年間で大規模な県立高校再編が進められてきた。かつて地域随一の進学校として知られていた落合高校は、2004年度に就職希望者の多い至道高校を吸収し再出発。そして11年度には農業系専門学科をもつ久世高校と統合し、新たに真庭高校として生まれ変わった。真庭高校は前身校の流れをくみ、普通科と看護科・専攻科を置く落合校地と、生物生産科と食

品科学科を置く久世校地により構成される。本記事では、真庭高校落合校地を中心に、落合高校時代からの混乱をどう乗り越えてきたかを紹介する。

校長の常本直史先生は同校落合校地のルーツとなる落合高校について、「優秀な人材を輩出してきた重い歴史がある」という。しかし、少子化によりじわじわと進んできた生徒の多様化は、最初の学校統合で一気に進行。そんな大学進学を目指す生徒ばかりでなくなった状況でも、教育の方針や内容はかつて国公立大学進学者を多数輩出していた時代そのままという問題点が次第に顕在化していった。当時を知る教務課長の水本謙一先生はこう振り返る。「例えば伝統的に行ってきた朝学習では、自分の目標達成のためというよりやらされ感が目立つなど、従来の指導に生徒の意識がついてきていない状況でした。多くの教員は、学校が変わる必要性を感じていたと思います」

高まる危機感のなか 総学改革に活路を見出す

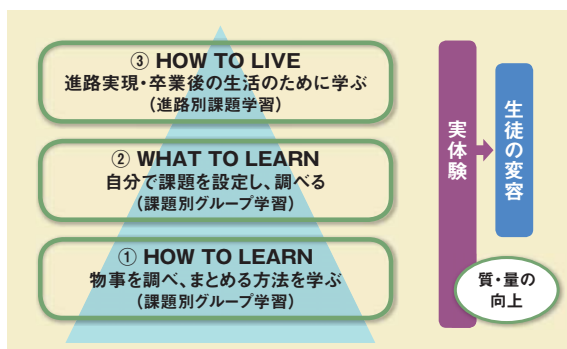
転機が訪れたのは、久世高校との統合を目前にした10年度だった。県教委が実施する「総合的な学習の時間」(総学)対象の「高等学校教科指導パワーアップ事業」推進校として、同校(当時

落合高校)が選ばれたのだ。

それまでの同校の総学は進路ワークを埋めていく作業を中心とした内容で、教員アンケートでは常に満足度が低かった。これを探究的な内容にリニューアルすることが、本事業の趣旨だ。

中山順充先生にはそれまでの勤務校で探究的な総学に取り組んだ経験があり、同校の総学に対する課題意識がとりわけ強かった。「やらせてください」。多様化した生徒の実態に合う教育実践への足がかりとして、生徒が自ら考え行動する探究活動を行いたい、一担任だった中山先生が推進リーダーに名乗りをあげた。研究主任のもとで中山先生が具体的な企画・推進を担い、各学年団と話し合いながら新しい総学のプログラム構築にあたった。

図1 「真庭トライ&レポート」3年間の見通し



真庭高校落合校地 近年の動向

2002年度	●岡山県立高等学校教育体制整備実施計画により、美作地区の教育体制整備の方向性が示される	落合高校 至道高校 久世高校
2004年度	●至道高校と統合し、新・落合高校としてスタート	
2010年度	●岡山県学力向上アクションプラン「高等学校教科指導パワーアップ事業」の研究指定校となる(研究主題「総合的な学習の時間」／～11年度) ●総学を「落高トライ&リポート(TR)」としてリニューアル	
	 	
2011年度	●落合高校と久世高校の再編統合により、2つの校地に分かれた真庭高校が開校	真庭高校 (落合校地・久世校地)
2012年度	●国立教育政策研究所教育課程研究センター指定事業の研究指定校となる(研究主題「思考力・判断力・表現力」／～13年度) ●「TR」にシンキングツールを導入	
2013年度	●全教科でシンキングツールを活用した授業をスタート	
	 	
2015年度	●「TR」を中心に地域の「しめ山プロジェクト」に参加	
	 	

新しい総学には、「落高トライ&リポート」(合併後「真庭トライ&リポート」・通称「TR」と命名。活動の中心は、グループあるいは個人でおよそ1年間にわけて取り組む探究活動だ。3年間で探究活動を繰り返すことで徐々に生徒をステップアップさせ、卒業後の進路につなげることを目指す(図1)。名称は「探究活動にトライし公の場でリポートする」という特徴を表している。「TR」は管理職含め教員全員の参加を基本とする。負担が増えるだけではないか——教員からは、そんな不安の声も聞こえてきた。しかし、動きを止めるほどの抵抗がなかったのは、やはりどの教員にも総学の改革に活路を見

学校を飛び出し
地域での体験を重視

出したという思いがあったからだろう。「TR」実践のキーワードは「地域」と「体験」。当初からこれを掲げて始めたわけではなく、実践から浮かび上がってきたものだ。地域に出ていくきっかけとなったのは、初年度に1学年が取り組んだ、地元の代表的な土産菓子を使って町おこしを目指す「落合羊羹プロジェクト」。就職した教員が大人と会話ができずに早期離職したという苦い経験から、水本先生が「異なる年代の人とコミュニケーションできる人にな

ってほしい」との思いで仕掛けた。「敬語も未熟な生徒もいた」というなか、思い切って地域に出したら生き生きと活動する生徒の姿があり、これが以後の「TR」の基本形に。各学年が年度ごとに「住みたいくなる街」や「災害への備え」など地域に関連した共通テーマを掲げ、それに基づいて各グループ・個人は個別テーマを設定。書籍やインターネットで調べるだけでなく、商店街でのインタビューや地域の人との交流を複数回行いながら課題解決に取り組んでいる。

望する生徒も増えた。その様子に、当初、教員が抱いていた不安感は和らいでいった。そして、「TR」の経験を生かした推薦・AO入試合格者が多数出て、久しぶりに国公立大学合格者が2桁という進路実績がある。方向は間違っていないと、逆風は完全に追い風に変わった。ただし、教員の視線は大学進学の方に向いている。「教員の間」に「地域を支える人材を育てる」という意識が強くなりました。10年後の真庭を支える人材を育てるのは本校しかない、という気持ちで取り組んでいます(中山先生) また、学年で1つの共通テーマに取り組む「TR」には、教員間の結束を強める効果もあった。職員室では学年団が「TRについて「今どんなんやってる?」「これがようわからんのだけだ」と、教科を超えて日常的に相談や情報交換を行うという。

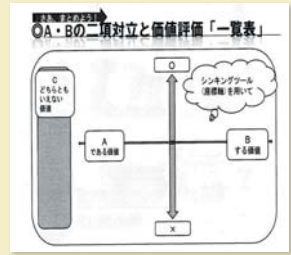
総学から各教科へ
授業で思考力育成の試み

総学の研究事業に続き、12年度からの2年間は国立教育政策研究所教育課程研究センターの研究指定事業に指定された。研究テーマは、次期学習指導要領のキーワードでもある「思考力・判断力・表現力」の育成だ。なかでも同校は「論理的な思考力」に焦点を絞り、その育成に有効なシンキングツールを使った授業を、総学をはじめ全教科で実施することを目指した。

図2 シンキングツールを活用した授業実践例

■ 現代文

- 単元：丸山眞男「『である』ことと『する』こと」
- 使用するシンキングツール：「座標軸」
- 流れ：前時間までで教材を精読したうえで、当時間は協同学習班に分かれて現代社会の事象を座標軸を使って整理する。
- 担当教員がとらえた生徒の姿：ツールを活用しながら、まず、個人の意見を明確にするところでは、「『根拠』をふまえて意見を述べること」の重要性を自覚することができた。各班における協議時間では、一人一係を決定し、責任をもつことで、意欲をもって協議に臨めた。発表の下準備では、二項対立の軸を用い、班内でまず共通理解することの不可欠性を理解した。発表場面では、(中略)自信をもって意見を述べることができたと思う。評価活動では、自己を客観的にみつめなおし、振り返りを行うことで、今回の活動の「メタ認知」的な行動について、少しずつではあるが、自覚できたのではないかと考える。



■ 数学Ⅱ

- 使用するシンキングツール：「KWL」(知っている・知りたい・学んだ)
- 流れ：① 予習として「KWL」の表にK(What I know)・W(what I want to know)を記入
② 授業の最後にL(What I learned)を記入
③ 復習としてLの記入したことなどをとくに課題に取り組む
- 担当教員がとらえた生徒の姿：実施当初は、K・Wの記入ができなかった。「書けない」という言葉も多く聞かれた。実施を重ねるごとに記入内容も充実し、わからなかったことが学んだとの知識で解決したかを、WからLへ線で結ぶことで表現する生徒も増えてきた。アンケートを実施した。(中略)その結果、予習ができていた生徒が94%、数学の学習や授業を受けるために役立っている生徒が72%となった。「教科書を見る機会が増えた」「ポイントをおさえて授業が聞け、理解度が上がった」などの肯定的な意見が多かった。また、「Lの部分があまくかけたら理解できるようになると思う」といった、達成された具体的な姿を考える生徒も出ている。

What I know 知っていること	What I want to know 知りたいこと	What I learned 学んだこと
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)	(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)	(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

教員のほぼ全員が「シンキングツールって何？」という状態からスタートだ。研究主任に任命された中山先生が率先して自らの授業(英語)に取り入れようと試みるも、「最初の半年間は空回りで終わった」という。そこで、シンキングツールに関する著書もある関西大学の黒上晴夫教授による教員研修会などで学びながら、段階的な導入を図った。

研究1年目の後半は、主に「TR」においてアイデア出しやレポートまとめのための情報整理などに活用を開始。2年目は全教科の教員が挑戦し、キーワードの整理や単元のまとめなどに活用するなど、全教科でシンキングツールを使用した授業を行うようになった(図2)。

日常的にシンキングツールを使うようになり、生徒は情報のアウトプットがうまくいっただけでなく、人の話を頭の中で整理しながら聞くなどインプットの面でも効果が出てきているという。進路指導課長の寺坂幸三先生はシンキングツールの有効性をこう語る。

「ワークシートとの違いは、既成の枠を埋めていくだけではない点。例えば『座標軸』のツールなら、縦軸・横軸を何の項目にするかから生徒自身が考えます。社会に出て、答えが1つではない問題に取り組み際にも役立つと考えます」

ゼロから出発して2年でここまで広がられたのは、「TR」で育まれた「教員みんなやろう」という土壌があった

図3 地域に根差した「真庭トライ&レポート」のテーマ例(2015年度普通科)

■ 1学年課題別グループ学習
共通テーマ「住みたくなる街」

地域を住みたくなる街にするにはどうしたらよいか、興味・関心をもつ分野を選択し、フィールドワークを通じて具体策を提言する。

分野	テーマ例(グループ・個人)
雇用創出	「ゆるキャラを使った地域のPR」「移住定住が生む雇用創出」など
交流・定住	「商店街～私たちにできること～」「落ちのいいとこ探し～横断幕づくりを通して～」など
子育て・教育	「住みたくなる街 放課後児童クラブ」「高齢者にとって住みやすい環境を考える」など
都市づくり	「防災マップの作成」「公共施設の利用」など

■ 2学年進路別課題学習
共通テーマ「しめ山プロジェクト」

地域の共通財産である「しめ山」と各々の進路を絡ませて、しめ山開発で地域貢献・地域連携を図るという共通テーマに基づき、各グループ・個人でテーマを設定。

分野(仮想部署)	テーマ例(グループ・個人)
地域産業課	「クモロジ茶～クモロジ茶の魅力を伝えたくて～」(商品開発に向けた試行)など
健康推進課	「MSP-mission school possible」(しめ山体操の考案)など
教育振興課	「知ろうしめ山 学ぼうしめ山」(しめ山の伝承をもとにした紙人形劇の制作・実演)など
観光振興課	「CM.....」(しめ山PR映像を制作し動画投稿サイトにアップ)など
環境バイオマス課	「しめ山版 竹取物語～しめ山の竹をエコストーブの燃料に～」(*)など

※第12回「全国高校生環境論文TUESカップ」鳥取県知事賞受賞

地域からの期待が高まるなか
失敗させる勇気をもつ

「これを学力の向上につなげるのは簡単ではありません。しかし、自分の中にあるものから思考を深めていくことで、小学校のころに感じたような『勉強は楽しい』という感覚を取り戻すきっかけになればと期待しています」

同校の変化に地域の見方も変わった。14年度末、住民会長が同校に声をかけた。「真庭高校裏にあるしめ山を地域の交流拠点として活性化させる『しめ山プロジェクト』に一緒に取り組まないか」。そこで、15年度に早速これを2学年の共通テーマに設定。しめ山

の伝承を題材にした子ども向け紙人形劇の制作・実演や、しめ山での運動前に行う準備体操の考案など、各グループ・個人の希望進路と絡めた観点からしめ山の活性化に取り組んだ。今年度は1学年が昨年度の活動を発展させている。

「以前あった壁がなくなり今は『地域の中にある学校』になった」と水本先生。地域からの期待の高まりは喜ばしい一方で、その期待に応えようと教員が失敗を恐れるようになる面もあるという。そこで改めて中山先生は「失敗してもいい」ということを他の教員と共有した。

先日、「TR」で商店街活性化策に取り組むグループが、外部から人を集めるアイデアについて話を聞きに行った際、商店のおばあさんに不安を与え泣かせてしまった。そこでインタビュー先



TR推進リーダー
中山順充先生



進路指導課長
寺坂幸三先生



教務課長
水本謙一先生



教頭
山本芳美先生



副校長
森川道安先生



校長
常本直史先生

「我々にとって『TR』で一番大事なことは、地域を活性化させることではなく、生徒を成長させること。だから失敗してもいいんです。そんな試行錯誤こそ本物の学びがあるのです」(中山先生)

「まずやってみよう」が切り拓いた新たな学校の姿

以前、落合高校に勤務し、10年ぶりとなる今年度、真庭高校落合校地に副校長として戻ってきた森川道安先生は、「まったく違う学校になった」と驚いたという。生徒は物事に前向きに取り組む、「TR」の活動成果は外部のコンテストで入賞するなどの成果も出ている。率先して人のために行動できる生徒が増え、街中で同校生徒に助けられたとお礼の電話が入ることも珍しくない。

最初から明確な目標と綿密な計画があったわけではなかった。どの教員も変革の必要性は感じていたものの、その内容はばらばらだった。そんななかで「TR」を軸に学校の変革をリードしてきた中山先生の基本姿勢は、「失敗してもいいから、まずやってみよう」。手探りで取り組むうちに、まず生徒の意識が変わった。そのことが教員の気持ちと束ね、「地域を支える人材の育成」と

いう共通の思いをもって力を合わせるようになった。実践しながら少しずつ教員の視点を揃えていく。これも「カリキュラム・マネジメント」の1つの始まりのかたちだろう。

「最初から完成品を作ろうとすれば、いつまでたっても始めることはできなかつたかもしれません。大切なのは、失敗してもいいから、まずやってみる。それを評価して次に改善すること、どのくらいのものになっていくのではないのでしょうか」(中山先生)

改善のために、同校は毎年度末、生徒アンケートを実施している。昨年度からは探究学習に力を入れる高校と連携し、同じアンケート項目を使用し、学校間比較も含めた調査・分析を始めた。

「教員は私も含めて保守的で変化が怖いものですが、勇気を出して一歩を踏み出すことが大切です。本校は形だけの前年踏襲はなく、その一歩を常に続けてきました。生徒と一緒に先生方も成長していると感じます」(常本校長)

生徒募集の面では依然として定員割れが続いているが、志願者は着実に増えている。学校全体でつくってきた上向きの流れを、さらに加速させる方針だ。

「今後も事務室を含めて課題を共有し、学校全体で総力を挙げて改善を図っていきたいと考えています」(常本校長)

真庭高校 落合校地のカリキュラム・マネジメントの概要

